

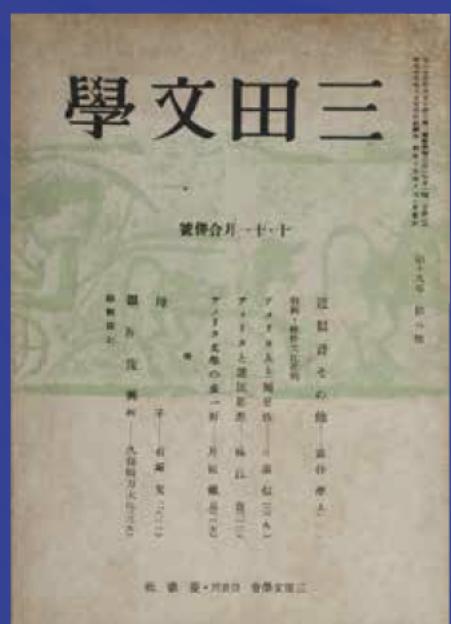
「三田文学」を読まないものは
文学を知らないものである。

— 永井荷風

オンライン版

三田文學

2016年春刊行



あらたなる『三田文学』

三田文学会理事長 吉増剛造

明治43（1910）年、永井荷風を主幹として誕生した『三田文学』は、七度の休刊及び活動休止を経験しながらも、平成22（2010）年に創刊100年の節目に達し、いまも力強い歩みをつづけています。

創刊以来『三田文学』は、慶應義塾の文学科顧問に就任した森鷗外、上田敏、さらに塾出身の佐藤春夫、水上瀧太郎、久保田万太郎らが健筆を揮う舞台となるだけではなく、泉鏡花、谷崎潤一郎のような反自然主義の作家たちの拠点として、あるいは若き井伏鱒二、丹羽文雄、坂口安吾ら塾外の才能にとっての登竜門として、日本の近代文学史上きわめて重要な役割を担ってまいりました。また文学の公器たらんとする編集方針にもとづき、小山内薫の伝統を継ぐ演劇人、西脇順三郎、折口信夫をはじめとする学匠詩人、そして同時代西欧の文学、思潮の翻訳・紹介に積極的に誌面を提供してきたことは、『三田文学』の顕著な特色でした。近年、日本の近代文学や文化に対する関心が世界的なひろがりを示しておりますが、そのような傾向も本誌の資料的な価値をいよいよ高めているとも言えるでしょう。

しかしここに問題が生じてまいりました。『三田文学』が刻んでまいりました100年は、近代的な製紙技術の紙の寿命とされる時間とほぼ合致しております。とくに、用紙確保の非常に困難なときに懸命に刊行を持続しておりました第二次大戦期の『三田文学』は、紙質の劣化が著しく、資料としての保全が喫緊の課題となっていました。

そこでこれを救うため、そして資料としての公共化をともに図るため、このたび『三田文学』創刊100周年を記念する企画の一環として、創刊号（1910年5月号）から、太平洋戦争期の空襲による刊行途絶（1944年11月号）までの397冊を、デジタル資料というかたちで復刻することと致しました。これまでの紙及びマイクロフィルムとは異なり、カラー画像で撮影されましたデジタル資料は、洗練された『三田文学』の表紙そして誌面を鮮明に再現いたします。

若く瑞々しい感受性による創作、そしてなによりも歴代の編集長、編集にたずさわってこられた方々との情熱に報いつつ、『三田文学』という貴重な資産を広く研究者等にも提供をし、20世紀の文化の香りと記憶を刻んだアーカイブとして活用していくことを祈りつつ、『三田文学』100年の歴史にあらたな1ページを開きたいと考えております。

2015年9月



オンライン版『三田文学』に寄せて

坂上 弘

2010年に私は『三田文学』創刊100年展を実施する三田文学会の理事長という立場にあった。私は、1910……2010年……∞とノートに描きつつ、運命的な大仕事を果してできるだろうかと思った。このエクセントリックな高揚は、同じ『三田文学』から出発した作家の高橋昌男君が、それは君の報恩の気持のたかぶりさ、と鎮めてくれたが。

たしかに私は1954年に復刊した戦後第3次の『三田文学』で育てられた。この戦後10年を経て復刊した『三田文学』をおいて私の出発はない。

それはともかく、2010（平成22）年の10月25日～11月7日に三田の旧図書館で開催した三田文学創刊100年展は、文学部だけでなく大学創立150年の記念事業の一つにもなった。

そしてこのオンライン版『三田文学』の実験版も、この三田文学創刊100年展の一つとして、雄松堂の力で会場にコーナーが設けられ、明治期の近代文学が生まれる姿やその時代背景を、つぶさにバックナンバーから研究することができるおもしろさを示した。このたびのオンライン版『三田文学』は、これをもとに、創刊から戦時中までの、第1次、2次、3次『三田文学』が収録できた画期的な文学アーカイヴである。

明治43年5月の創刊以来、『三田文学』は、独特の文体をもつ存在として生きてきた。文体とは、思想の容れものという意味であるが。これは、その編集に携わる荷風、鷗外の瑞々しさを除いてはありえない、自由と異端の姿勢であったといえるだろう。この異端も、谷崎潤一郎の「飈風」が掲載されると発禁になり、学校側との軋轢もおこる。こうした日本近代文学の姿が克明にたどれるのが、このオンライン版である。

ところで私は普段から『三田文学』の創刊号以来の全巻を閲覧できるのが、三田の慶應義塾大学図書館7階のコーナーにあることを知っていた。ここで私は、全巻をひもとくことができた。しかしこれらのバックナンバーは、一組しかない上、製本してあるので、三田文学100年展の展示には供することはできなかった。困っているところを助けてくれたのが、水上瀧太郎（阿部章蔵）さんの長男阿部優蔵さんである。水上瀧太郎の蔵書を全部提供してくれた。『三田文学』創刊100年展はこの他に100をこえる個人、機関の協力をえて大成功に飾ることができた。

私は『三田文学』をひもとくうち、三田の文人で最も会ってみたかったのは水上瀧太郎であると思った。この瀧太郎は、荷風のもとで学生作家として登場し、其後編集主幹になって『三田文学』を福澤先生の為残した仕事といい、学塾にとらわれない新人登場に力を入れている。丹羽文雄や井伏鱒二も瀧太郎の時代に出てくる。義弟となった小泉信三さんは創刊号から一号も欠かさず読んだのは、『三田文学』だけだと応援・愛読する。こうして『三田文学』が大学文学部の歩みと相俟って、広く新人に公器としての場所になり、ことばの自由を支え、新しい文学をうみ出す。その「自由と異端」は荷風の時代から一貫している。

このたびオンライン版『三田文学』は雄松堂書店のおかげでできた。まず1910年荷風時代から1944年の戦時中まで完成した。懸案の著作権処理についても、さまざまに手を尽し、文化庁長官裁定を申請して時代の役に立つ努力への理解を得た。

このオンライン版の研究者にとってのおもしろさは、雑誌という生きものが時代のまま手に入ること、雑誌の中の時代テーマを隅々まで駆けめぐらすことができる。その時代の出版界や広告の呼吸から勿論編集者の思想や大誤植まで。雑誌は生きもの、気づかない歴史の奇跡が見つかるのも、このオンライン版である。多方面のご理解をいただき出来上ったオンライン版『三田文学』を、日本近代文学研究に役立てていただきたい。



（日本近代文学館理事長）
元三田文学会理事長

三田文學 をもっと見やすく、もつ

刊行一覧からの閲覧はもちろん、
作品・記事名、執筆者名、年代、ジャンルなど
多様なアプローチが可能

トップ画面▶

I 研究者が監修したナビゲーション

巻頭から巻尾まで通観する▶

① 雑誌を年代順に読む

読みたい記事・作品がすぐ見つかる

② 雑誌を検索する

記事・作品名

執筆者名

年代

ジャンル

- 小説・戯曲 詩・短歌・俳句
- 評論・エッセイ 雜報・雑録 その他

読みたい執筆者から記事・作品を探す

③ 執筆者一覧

オンライン版「三田文学」に収録されている
執筆者を一覧で表示。▶

本名から、雅号から、ペンネームから—
辞書機能による一括検索

II 執筆者名辞書

執筆者の名前を別名やペンネームも含め同定することによつて、同一人物による作品の一括検索を可能に

例えば「永井荷風」で検索すると…

「吉野紅雨」「安野寧夢」「金富參川」

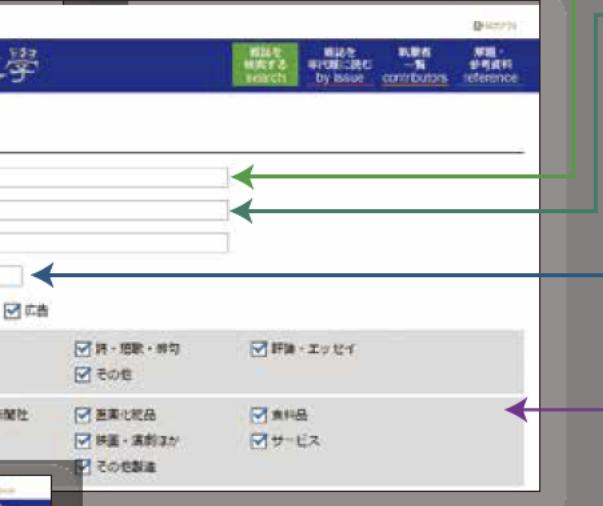
これらの執筆者名で書かれたすべての作品・記事がヒット！

The screenshot shows a search interface for the 'J-DAC オンライン版 三田文學'. The search bar contains '1901-1910'. Below it, a list of magazine titles from that period is shown. To the right, there are two columns of thumbnail images representing different issues or articles.

The screenshot shows the '執筆者一覧' (Author Index) page of the J-DAC online version of Sanada Shashin. The page features a grid of names and their corresponding links. At the bottom, there is a detailed search form with various filters like '年代' (Period), '検索対象' (Search Target), and 'ジャンル' (Genre).

と自由に オンラインデータベースの3つの特長

経済史
教育史
社会

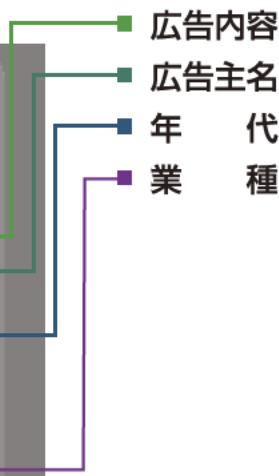


社会、文化、風俗、経済、経営など
人文社会科学系全般の研究資料としての
可能性を秘めた情報の宝庫

広告データベース

商品名、書籍や映画のタイトルなどの広告内容
及び広告主を採録し、8つのジャンルに分類
広告のジャンルは文学にとどまらず多岐にわたる

(詳しくは右記の表をご覧ください。)



【出版・書店・新聞社】岩波文庫第一回
(1927年8月)



【商業】丸善
【金融・保険】千代田生命保険相互会社
(1928年1月)

明治43年～昭和19年

編集主幹を軸に5つの時代
充実の解題を付す。

永井荷風時代 (1910.5～1916.6)
スタイルリッシュな誌面つくりを目指す上田敏・泉鏡花・谷崎潤一郎・与謝野千秋・久保田万太郎・水上瀧太郎ら、学生時代

沢木四方吉時代 (1916.6～1926.4)
荷風が去った後は沢木四方吉(梢)が、瀧太郎らが活躍する。

水上瀧太郎時代 (1926.4～1937年)
一度休刊に追い込まれた『三田文学』で復刊する「三田派」の面々だった。勝本正三編集担当者の尽力もあって、石坂洋次郎・慶應ゆかりの作家たちが活躍したほか、積極的に採用された。



永井荷風「紅茶の後」初回 (1910年5月)



水上瀧太郎「貝殻追放」初回 (1918年1月)

▲ 東京发声映画製作所「若い人」
(1937年8月)
改造社より単行本刊行、連載終了をまたず映画化決定、
1937年11月に封切。
同月築地小劇場でもP.C.L劇團によって上演された。

◀ 石坂洋次郎「若い人」終編
(1937年12月)



業の教材や
論文のための
資料としても
有用です！

広告主の例

<出版・書店・新聞社>

改造社 岩波書店 東光閣 博文館
丸善 粉山書店 アルス ブラトン社 河出書房 丸善
紀伊國屋 求龍堂 虚無思想社 金星堂 研究社
砂子屋書房 三省堂 赤門書房 中央公論社
東雲堂 富山房 金港堂 武蔵野書院
文芸汎論社 東京堂 朝日新聞社 時事新報社

<医薬化粧品>

資生堂 ライオン歯磨本舗小林商店
レート化粧料本舗平尾賛平商店
栄養と育児の会（わかもと） 塩野義商店 仁丹
星製薬

<食料品>

明治製菓 森永製菓 山本海苔店 大日本麦酒
帝国鉱泉 麒麟麦酒 金線飲料
カフエーパウリスタ 明治屋 不二家
大日本製糖

<金融・保険>

第一生命 安田生命 千代田火災海上保険
大同生命 第一微兵保険 帝国生命保険
日本生命 明治生命 三井銀行

<映画・演劇ほか>

松竹 大映 朝日映画 満映 東宝 日活
新交響楽団 築地小劇場 東京宝塚劇場 文學座
有楽座 コロムビア ピクター

<サービス>

ハゲ天 はち巻岡田 玉乃井旅館 宝塚ホテル
目黒雅叙園 興亞拓殖 湘南電鉄 東京横浜電鉄
東京湾汽船

<商業>

高島屋 三越 松屋 大丸 松坂屋 西川 伊東屋
服部時計店 大勝堂 天賞堂 文房堂
日本体育用品 美津濃

<その他製造>

トンボ鉛筆 中山太陽堂 王子製紙 鐘淵紡績
古河石炭鉱業 小西六 千代田楽器 宮田製作所



「オノト万年筆」ほか
千代田生命保険相互会社



【映画・演劇ほか】東宝映画「支那の夜」
【出版・書店・新聞社】春陽堂「夢みる人」（新田潤著）ほか
(1940年6月)



【映画・演劇ほか】宝塚少女歌劇月組正月公演
【映画・演劇ほか】東宝映画「海軍陸戦隊」
(1939年2月)

9年まで 近代文学の流れを『三田文学』から読む 解題・参考資料編

時代に分け、

6.5) 解題：五味済典嗣

若き編集主幹・永井荷風のもと、森鷗外・晶子らの作品が掲げられる。やがて、佐藤春夫・作家も登場する。

25.3) 解題：和泉 司

主幹に就き、芥川龍之介・小島政二郎・南部修

33.12) 解題：網倉 黜

復刊にまで導いたのが、水上瀧太郎を中心と清一郎・平松幹夫・和木清三郎と受け継がれた次郎・北原武夫・西脇順三郎・丸岡明といったか、坂口安吾・保田与重郎ら、三田以外の新人

和木清三郎時代 (1934.1 ~ 1944.3) 解題：尾崎名津子

編集者和木の編集方針に基づき、和田芳恵・岡本かの子など新進の作家・評論家が積極的に登用された。また井伏鱒二・丹羽文雄ら早稲田出身の作家たちも作品を発表。

戦時末期 (1944.4 ~ 10) 解題：五味済典嗣

時代の流れに呑みこまれながらも『三田評論』などと合併して総合雑誌として生き延び、敗戦直前まで刊行を続けた。

『三田文学』年表つき。

『三田文学』創刊100年展 (2010年) 図録に併載の「三田文学 百年ノート」(平井一麥・加藤博信氏作成)より今回収録対象となった1910~1944年までを年表として抜粋転載。『三田文学』史上に起きた主な出来事、編集者や登場作家を取り上げ、『三田文学』の歩みを通覧すると同時に注目すべき作品・記事が一目でわかる。

推 薦 し ま す

対立を演じられた時代

東京大学文学部教授 安藤 宏

『三田文学』は、あらためていうまでもなく、近代文学の黄金期を代表する旗頭の一つである。当時、自然主義の『早稲田文学』、耽美派の『三田文学』、学習院の『白樺』、東京帝大の『新思潮』、と言った具合に、文学思潮、人脈が大学、雑誌ごとにあざやかに分立していた。それぞれが自らの役割を自覚し、意味のある対立を演じることができたからこそ、近代文学はその全盛期を迎えることができたのである。

『三田文学』といえば、誰もがまず、創刊当初の永井荷風の編集時代、森鷗外、上田敏、谷崎潤一郎らが活躍した時期を連想するが、実は水上瀧太郎が立て直した昭和期も、見過ごすことのできぬ意味を持っている。井伏鱒二、石坂洋次郎、原民喜らを送り出し、三田文学会賞が設立されたほか、息長く続いた「今月の小説」欄は、昭和十年代の小説を調べる際に必ず参照されるべき重要な同時代評である。従来の紙媒体の復刻は大正期までなので、その意味でも今回の企画は大変ありがたい。



近代の文芸雑誌の復刻は、紙媒体から始まって、マイクロフィッシュ、DVDなど、さまざまな試行錯誤を重ねてきた。いずれも短所があって決定打にはなり得なかったのだが、今後はオンライン版に集約されていく動きが加速するものと思われる。場所をとらず、OSに惑わされずに自由に検索をかけられるこの形態は、現在望みうる最良の形といえるだろう。主要雑誌の先鞭を切る今回の企画は、その重要な第一歩になるものと思われる。執筆者はもちろん、記事もジャンルごとに検索が可能で、さらに業種別に広告の検索もできるので、使い方によって、広く同時代文化の研究に資することになるだろう。

いずれ冒頭に記した黄金期の雑誌達が一堂に会し、包括的な検索が可能になる時代を心から待ち望む次第である。

文学の伝統は私学が担ってきた

日本大学文理学部教授 紅野謙介



『帝国文学』に比べて、文学史上における『三田文学』『早稲田文学』の意義は比較にならないほど大きい。政界・官界と結び着いた帝国大学の時代から、国立大学は現代の文学にほとんど価値を見出することはなかったのである。それに対して、私立大学は出版資本の未成熟なときには文学の発展を下支えし、文学の市場が成立してからは資本の論理の及ばない領域に光をあて、若い書き手を支援した。関連組織のかたちに姿は変えながら、これはいまもなおつづき、近代日本のパトロネージュとして高く評価されるべきであろう。なかでも『三田文学』はその清新さで群を抜いていた。40年前に複刻版は出たが、わずか7年分で終わった。今回のオンライン版はそれ以後、戦時期までが収録されている。出版資本主義の渦巻くなか、あるいは言論統制の強まるなかで、『三田文学』はどのような文学的発信を続けたのか。あらためて検証する機会がうまれたことを喜びたい。

塾外にも広く門戸を開き、自然主義文学全盛の中
「自由と異端」を貫いた清新な文芸誌

オンライン版

三田文學

『三田文學』は、慶應義塾幹事の石田新太郎の主導により、文学科教授の森鷗外と協議し、上田敏を顧問に、永井荷風を主幹に据えて1910年（明治43年）5月に創刊された。当時自然主義の牙城として隆盛を極めていた『早稻田文学』に対抗して、『スバル』『新思潮』等のメンバーが結集した。以来、多くの作家・詩人を輩出し何度も休刊を経ながら現在も存続する歴史ある文芸雑誌である。今回、特に貴重で復刻の意義が大きい戦前・戦時期の同誌、計397冊をデジタル化しオンラインで公開する。



創刊号目次

編集・発行：三田文学会

監修：五味渕典嗣（大妻女子大学文学部准教授）

定価：1,500,000円+税

対象資料：明治43年5月号（1910年創刊）～昭和19年10・11月合併号（1944年）全397冊

画像数：約36,000画像

レコード数：約1万7千件（記事・作品=約1万件、広告=約7千件）

プラットフォーム：J-DAC ジャパン デジタル アーカイブズ センター

ご契約に関して

- ご契約に際しては資料への恒久アクセス権をご購入いただきます。
- 導入されたコンテンツは、そのままでは利用・閲覧できず、プラットフォームが必要となります。プラットフォームとは、コンテンツから必要な情報を検索し、閲覧するためのツールのことです、いわばデータベースを動作させる基盤となるものです。
- ご契約の際は所属機関のIPアドレスが必要となります。

○ ブラウザは、Internet Explorer 9 または Firefox 3.5 以上のご利用を推奨します。

これら以外の場合、一部の機能が使えない場合があります。

○ 画像は、原資料の劣化等により、一部、不鮮明な場合がございます。

MARUZEN-YUSHODO

丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 開発部 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町10-10

Tel: 03-3357-1449 Fax: 03-4335-9419 Email: archives@maruzen.co.jp <http://myrp.maruzen.co.jp/>